

部より出でたる人の名に冠して、姓として用ゐたること、假令ば僕固懷恩の如ければ、僕固俊といふものも、僕固より出で俊の名を有したるものなりしこと疑無かるべし、果して然らば僕固俊の勢力によりて建てられたる高昌地方の回鶻の可汗は、此の後自から僕固回鶻可汗或は僕固の回鶻可汗と稱したるものなるかも知る可らず、而して錢面に見ゆる *buyur* (*boyur*) *uirur* *Yayan* 摩尼教文書に見ゆる *uirur buyur* (*boyur*) *Yan* といふものは、かゝる語を寫したるものと推察し得ざるに非ず、入聲音 *k* を有する文字を以て外國語を寫す場合には、*k* 音は消失することあれど、常に必ずしも然るに非ず、假令ば大唐西域記卷四に見ゆる至那僕底は ³² *China-bhukti* を寫したるものなるが如きは其の一例なり、されば僕 (**puk, *buk*) は *buy* (*u*) を寫し、固 (*Ku, ko*) は (*u*)*r* を寫したるものと見れば、音譯の上に於て不都合の存するものなし、但しかく見れば *buyur* を以て可汗の名とは解すべきに非ず。

上に述ぶるが如きを以て、此の貨幣の有する *buyur* の語によりて、之が牟羽可汗の時に鑄造せられたるものなりと見得べからざること勿論なるが、別に此の貨幣を錢質形式の上等より考ふるに、此の貨幣は後に述ぶべき開元頃のものと思はるゝ突騎施 (*Türgis*) の貨幣とは大に異り、厚さは薄く、其の含有せる銅の分量は甚だ少く、黒色の面の磨出されたる一部分は眞鍮色を呈し、突騎施の貨幣が銅色を現はせるに比すれば遙に後のものならざるべからず、之を形及び質の上より考ふる時は、宋の末、或は元代のものとするを以て當れりとすべしとは、此の貨幣の所藏者にして、古錢に關する多くの智識を有する奥平昌洪氏の語れる所なり、余は別に書體の上より見るも亦之が突騎施の貨幣に比して、後代のものなるべきを推定するものなりと雖、此の考は資料の少き今日に於ては、未だ絶對的の證左と爲すには足らざれば、今茲に強いて此の點より見たる推斷を下さざる可し。